

# 話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」 「～ないです」を選択する言語外的要因

李 依格 (湖南大学大学院生)・張 佩霞 (湖南大学)・  
玉岡 賀津雄 (湖南大学・名古屋大学名誉教授)

## 要旨

本研究では、話し言葉における動詞の否定ていねい形の二形式である「～ません」と「～ないです」の選択に関して、タスク、話し手の性別、話し手の世代、の3つの言語外的要因について検証した。『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に収録された日本語母語話者50名の話し言葉のデータを利用し、タスク、話し手の性別、話し手の世代という3つの要因で「～ません」と「～ないです」の選択を予測する分類木分析を行った。その結果、もっとも強い影響要因はタスクであり、対話的か否かが決め手であった。モノローグ的なタスクでは基本的に「～ません」が使用され、ダイアローグ的なタスクでは「～ないです」が頻繁に使用された。また、性差はみられなかった。世代差は、対話タスクにおいてのみみられ、「～ないです」の使用率が20代で96.0%、30代および40代・50代では84.6%に減少した。

キーワード：否定ていねい形、～ません、～ないです、分類木分析、コーパス

## Language-external Factors for Choosing the Polite Negative Verb Forms *-masen* or *-naidesu* in Spoken Language

LI Yige (Graduate Student, Hunan University)・  
ZHANG Peixia (Hunan University)・  
TAMAOKA Katsuo (Hunan University,  
Professor Emeritus at Nagoya University)



## Abstract

The present study examined the selection factors for the polite negative verb forms *-masen* or *-naidesu* in spoken language. Three language-external factors of task, gender and generation were identified using the I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language) of 50 native Japanese speakers. A classification tree analysis was conducted to predict the selection of the two *-masen* or *-naidesu* forms based on the three factors of task, gender and generation. The results showed that the strongest factor was task, which indicated whether it was dialogical. In monologic tasks, *-masen* was basically selected. By contrast, in dialogic tasks, *-naidesu* was frequently selected. No effect of gender was found. The effect of generation was seen only in the dialogue task. The selection percentage of *-naidesu* decreased from 96.0% for I-JAS native Japanese speakers in their 20s to 84.6% for those in their 30s, 40s and 50s.

**Keywords:** polite negative forms, *-masen*, *-naidesu*, classification trees, corpus

### 1. はじめに

現代日本語の否定ていねい形<sup>1</sup>には、「～ません」と「～ないです」という2つの形式がある。「行く」を例にとれば、「行きません」と「行かないです」が2つの否定ていねい形である。寺村(1984: 53)は、日本語の観察から、「動詞、たとえば「読ム」の否定形は「読マナイ」であるが、その丁寧な形は、「読ミマセン」のほうがふつうで、「読マナイデス」はあまり使われない」と述べている。一方、日本語記述文法研究会編(2003: 234)では、「「ません」の方が一般的な形式であるが、話しことばでは「ないです」を用いることも多い」と説明している。また、国立国語研究所が開発した『日本語歴史コーパス』で検索したところ、動詞の「～ないです」形が出現したのは1864年のことである。それに対して動詞の「～ません」形は1707年からすでに用例がみられる<sup>2</sup>。通時的な観点からすると、より早く出現している「～ません」が

<sup>1</sup> 「～ません」と「～ないです」という二形式について、田野村(1994)と小林(2005)は「丁寧体の述語否定形」、野田(2004)は「否定ていねい形」と異なる名称を使用している。本稿では野田(2004)に従い、「否定ていねい形」という名称を使う。

<sup>2</sup> 『日本語歴史コーパス』では、動詞の「～ません」形の由来である動詞の「～ませぬ」形が1642年から出現している。



話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因標準的であり、一般的な形であると考えられる。しかし、二形式が併存している現代日本語においては、日本語母語話者はそれらを場面に応じて区別して用いているのではないかと思われる。そこで本研究では、動詞の否定ていねい形である「～ません」と「～ないです」の使用頻度を手掛かりに、日本語母語話者の「～ません」と「～ないです」を選択する言語外的要因を解明した。

## 2. 先行研究

「～ません」と「～ないです」に関して、これまでに多くの研究がなされてきた。各研究で使われたデータをみると、書き言葉を中心とした研究および話し言葉を中心とした研究に分けられる<sup>3</sup>。本研究では、話し言葉に焦点をあてて検討するが、書き言葉に基づいて「～ません」と「～ないです」の選択における言語外的要因を指摘した先行研究もあることから、書き言葉を中心とした研究も概観する。

書き言葉を中心とした研究には、以下のようなものがあげられる。田野村(1994)は1989年から1992年までの『朝日新聞』の記事を調査した結果、「ある」を除いた動詞の否定ていねい形の使用率は、「～ません」が98.4%で「～ないです」が1.6%であったと報告しており、使用頻度に大きな差がみられた。また、坂野(2012)と落合(2012)は国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使って頻度を調べている。そして、両研究共に「～ないです」の使用率が「Yahoo! 知恵袋」「国会会議録」「書籍」の順で下がっていると報告している。坂野(2012)は、この結果は、改まり度によるものだと解釈している。落合(2012)も、場面の違いの観点から解釈しているものの、改まり度が直接の影響要因ではなく、むしろ想定される受け手の人数が直接の影響要因だと指摘している。落合(2012)はさらに、対話の双方向性が高いと「～ないです」が使われやすいと結論付けている。場面における改まり度と対話の双方向性が「～ません」と「～ないです」選択の言語外的

---

<sup>3</sup> 分析の便宜上、本稿では原則としてコミュニケーションの媒介(medium)が文字のものは「書き言葉」、媒介が音声のものは「話し言葉」とみなす。ただし、小説における会話文やシナリオは話し言葉とみなす。



要因である可能性が示唆される。

話し言葉を中心とした研究には、次のようなものがあげられる。福島・上原(2003)は大正9年～昭和4年，昭和31年～43年，平成8年～14年の3つの年代から各2冊，合計6冊の小説における会話文を分析し，全体として「～ません」の出現率が高いこと，上記の3つの時期では「～ません」の出現率は，99%→94%→89%と下がっているのに対し，「～ないです」の出現率は1%→6%→11%と上がっていることを報告している。加えて，「～ないです」が男性によって使用される傾向も報告している。福島・上原(2003)の調査により，比率には大きな差があるものの，「～ません」と「～ないです」が併用されるようになってきていることが窺える。

また，野田(2004)はシナリオ，対談，自然談話(データの出所は現代日本語研究会編の『女性のことば・職場編』および『男性のことば・職場編』であり，以下この2冊を職場談話と略す)を調査した結果，「～ないです」の使用率は，シナリオが2割程度，職場談話が6割程度だと報告している。また，小林(2005)は国立国語研究所が開発した『名大会話コーパス』および職場談話を合わせて調査したところ，「～ません」が3割程度，「～ないです」が7割程度の使用率だと報告している。つまり，双方向のやりとりのある会話において，「～ないです」が多用される傾向がみられるようである。

さらに，石川(2020a)は，国立国語研究所が開発した『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の対話タスクを中心に，ストーリーテリングタスクと比較して，日本語母語話者の動詞の「～ないです」の使用率は，対話タスクでは68.5%であるのに対して，ストーリーテリングタスクでは0%であったと報告している。加えて，対話タスクのデータでは「～ないです」の使用に性差がないこと，若者より中高年が「～ません」を好む傾向があることも報告している。さらに，石川(2020b)では『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を使用して両表現の使用比率を計算している。そして，動詞の「～ません」の使用率が43.4%(53例)で，「～ないです」の使用率が56.6%(69例)であったと報告している。ただし，筆者がカイ二乗分布を使った一様性の検定で「～ません」の53例と「～ないです」の69例の頻度を分析した結果，有意な違いはなかった [ $\chi^2(1)=2.098, p=0.147, ns$ ]。そのため，石川(2020b)が主張し



話し言葉における動詞の否定でいねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因

ているような「～ないです」のほうが「～ません」よりも多用されるとする議論は成り立たない。また、石川(2020b)では、年齢、性別、役割(ホスト役のベース話者かゲスト役の対話者か)、談話状況(「笑いあり」状況か「笑いなし」状況か)が、「～ません」と「～ないです」の選択に影響するとしている。ただし石川(2020b)では、122例についてのこれらの特性で分けた条件での統計的な検討は行われていないので、厳密に使用頻度に違いがあるかどうかは判断し難い。

先行研究から次の3つの課題があげられよう。第1に、坂野(2012)は「改まり度」、落合(2012)は「対話の双方向性」を「～ません」と「～ないです」の選択の要因であるとしており、両研究で場面に関する影響要因への解釈が異なっている。そのため、改めて場面に関する影響要因についての検討が必要であろう。第2に、「～ません」と「～ないです」の選択に関する性差について異なる報告がある。福島・上原(2003)と石川(2020b)は、性差があると報告しているが、石川(2020a)は性差がないと報告している。二形式の選択における性差について検証の必要があろう。第3に、石川(2020a)と石川(2020b)は二形式の使用に関して年齢の影響を示唆している。しかし、年齢については、他に報告がなく、検討の余地がある。

本研究では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(International Corpus of Japanese as a Second Language; 以下、I-JAS)に収録された日本語母語話者のデータを使用して、50名の日本語母語話者の異なるタスクで産出した話し言葉を使って、否定でいねい形「～ません」と「～ないです」を選択する言語外的要因を検証する。

### 3. 本研究で検証する言語外的要因

複数の要因を同時に検討するために、分類木分析(決定木分析の一種)の手法を用いて検証した。分類木分析は、複数の説明変数(独立変数)で名義尺度の目的変数(従属変数)を予測する分析法である(玉岡 2023)。玉岡(2006)は、分類木分析をコーパス研究へ応用しているが、結果が平易で総括的に提示されること、一連の判断を自動的かつ最適に行ってくれること、情報を有意水準に基づいて提供してくれることの3つのメリットをあげている。本研究で



は、(1)タスク、(2)話し手の性別、(3)話し手の世代の3つの言語外的要因を説明変数として、「～ません」と「～ないです」の二形式の選択を目的変数として予測した。

## 4. 頻度データの収集方法

### 4.1 I-JAS コーパスのタスク

本研究は、I-JASでの日本語母語話者のデータを使用した。I-JASは学習者コーパスであるが、日本語母語話者50名の6つのタスクで産出した話し言葉のデータも含まれている(迫田・小西・佐々木・須賀・細井 2016)。本研究の目的に合ったデータであると判断される。中納言でI-JASから抽出したデータに書いてある話者情報に基づいて、性別と世代で分けた。その結果、これらの50名の日本語母語話者は、男性が23名、女性が27名である。世代は20代が19名、30代が14名、40代・50代<sup>4</sup>が17名である。本研究では、I-JASで公開されている日本語母語話者の対面調査データのうち、話し言葉のデータをすべて使用した。その内訳は、ストーリーテリング1、ストーリーテリング2、ロールプレイ1、ロールプレイ2、対話、絵描写である。

上記の6つのタスクの内容は、以下のとおりである。ストーリーテリング1・2は、話し手に連続したイラストをみせて、イラストが示したストーリーを話してもらうタスクである。イラストのテーマは、ストーリーテリング1が「ピクニック」で、ストーリーテリング2が「鍵」である。ロールプレイ1・2では、話し手の役割は日本料理店のアルバイトで、調査者の役割は日本料理店の店長である。ロールプレイ1は週3日のアルバイトを週2日してもらうという「依頼」のタスクで、ロールプレイ2はホールから調理に変わるように依頼され断るという「断り」のタスクである。対話では、調査者が話し手の現在のこと(好きな本・ドラマ、出身地の産物、観光スポットなど)、過去の体験(誕生日の祝い方、幼少期の体験、恩師の話など)、未来のこと(将来の夢)を聞き、また「都会に住むか田舎に住むか」「お金と時間とどちらが大事か」についての意見を述べてもらう。絵描写は、話し手に絵をみ

<sup>4</sup> 具体的には、40代が13名、50代が4名である。50代の人数が4名と少ないため、本研究ではこれらを1つにまとめた。



話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因

せて、その絵の内容を話してもらうタスクである。

#### 4.2 使用頻度の計算方法

本研究では、動詞の否定ていねい形を考察の対象、つまり頻度計算に含んだ。たとえば、「行きません」と「行かないです」のような動詞の辞書形の否定ていねい形、「行けません」と「行けないです」のような動詞の可能形の否定ていねい形、「行って(い)ません」と「行って(い)ないです」のような動詞のテイル形の否定ていねい形などが頻度計算の対象である。しかし、「ある」の「～ないです」の形は、単に「ないです」となる。そこで、田野村(1994)の「ある」に関する「ありません」と「ないです」の分類を参照して、「存在表現」のみを頻度計算の対象とした。実際、「存在表現」では動詞「ある」そのものを否定している。したがって、動詞の否定ていねい形に相当すると考えられる。たとえば、「机がありません／ないです」「聞いたこともありません／ないです」などである。なお、過去形の「～ませんでした」と「～なかったです」も含んだ。

一方、次にあげる表現は頻度計算に含まなかった。まず、田野村(1994)のいう「コピュラ表現」である。これらは名詞や形容詞などを否定するものであり、「本ではありません／ないです」「大きくありません／ないです」など動詞の否定ていねい形とは無関係である。また、「～ない」形の語やフレーズのうち、データ内でそれに対応する「～ません」が現れなかったものも含まなかった。たとえば、「つまらない」「しょうがない」「なくはない」「とんでもない」「半端ない」などである。さらに、「～ません」のうち、「ございけません」や否定を含意しない挨拶用語の「すみません」など、「～ないです」の形をとらないもの、あるいは否定の含意がないものも含まなかった。

以上の基準で使用頻度を集計した結果を表1に示した。



表1「～ません」と「～ないです」の頻度一覧表

タスク	～ません		～ないです		合計	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%
ストーリーテリング1	7	100.0	0	0.0	7	100.0
ストーリーテリング2	51	100.0	0	0.0	51	100.0
絵描写	21	75.0	7	25.0	28	100.0
ロールプレイ1	8	28.6	20	71.4	28	100.0
ロールプレイ2	11	23.4	36	76.6	47	100.0
対話	70	12.4	496	87.6	566	100.0
合計	168	23.1	559	76.9	727	100.0

### 5. 分類木分析の結果

本研究では、IBM SPSS 29のDecision Treesを使用した。図1に示したとおり、タスク、話し手の性別、話し手の世代(20代、30代、40代・50代)を説明変数とし、動詞の否定ていねい形の「～ません」と「～ないです」の2択を予測する分類木分析を行った。樹形図の枝の成長手法はCHAIDで有意水準は5%とした。

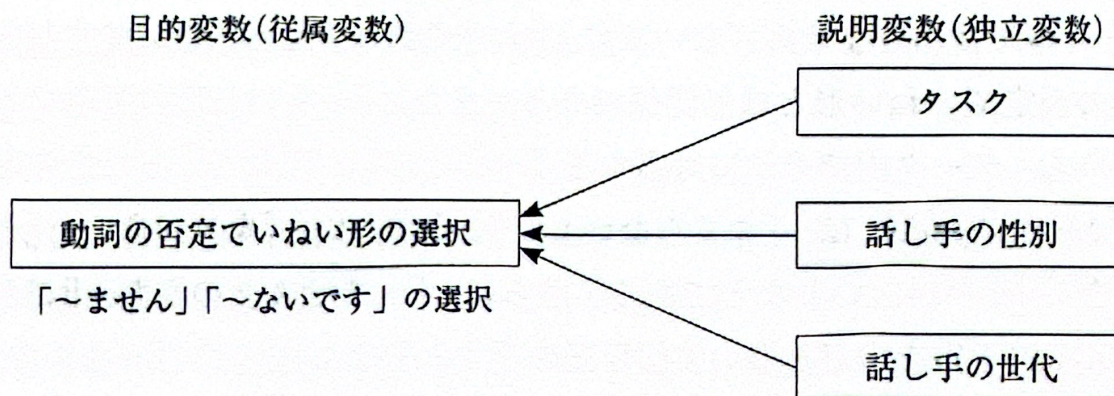


図1 本研究の目的変数(従属変数)と説明変数(独立変数)

また、頻度の少ない分析を排除するために、本研究は総頻度の2%(727例×2%=14.5例、四捨五入して15例)を樹形図の成長最小数とした。IBM SPSS 29で行った操作として、分類木分析の「基準」で「子ノード分岐」の「ケースの最小数」を15に設定した。なお、分類木分析では、出力された樹形図には有意な説明変数しか現れない。「最初の変数を適用」にチェックを入れない



話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因

場合は、もっとも影響力の強い説明変数が自動的に樹形図の上部に出力される。今回の分類木分析の相対リスクは13.2%で、3つの説明変数が86.8%の確率で目的変数を正しく予測した。

分類木分析の結果は、図2(次ページ)に示した。「～ません」と「～ないです」の選択にもっとも強く影響したのはタスクであった [ $\chi^2(3)=272.380, p<0.001$ ]。6つのタスクが有意に4つのクラスタに分類された。ストーリーテリング1、ストーリーテリング2では、「～ません」しか現れなかった(それぞれ7例, 51例)。絵描写でも「～ません」21例、「～ないです」7例と、否定ていねい形の形式は「～ません」に偏っていた。一方、ロールプレイ1とロールプレイ2では、「～ないです」の使用率はほぼ同じで、74.7%であった。対話での「～ないです」の使用率が、6つのタスクでもっとも高かった(87.6%)。図2に示したように、6つのタスクが、「対話的か否か」で大きく2つに分類されると考えられる。ノード1とノード2のタスクはモノローグ的なタスクであり、ノード3とノード4のタスクは、ダイアログ的なタスクである。モノローグ的なタスクでは「～ません」が高頻度で、ダイアログ的なタスクでは「～ないです」が高頻度である。

また、話し手の性別という説明変数は、図2に現れなかった。これは、「～ません」と「～ないです」の選択において、話し手の性別が影響しなかったことを示している。実際、「～ません」と「～ないです」の全体の頻度を話し手の性別で分けると、「～ません」が男性で86例、女性で82例であった。一方、「～ないです」は、男性で307例、女性で252例であった。この全体の頻度を、カイ二乗分布を使った独立性の検定で検討した結果、有意ではなかった [ $\chi^2(1)=0.723, p=0.395, ns$ ]。これで動詞の否定ていねい形の「～ません」と「～ないです」の選択において性差がないことが確認できた。さらに、対話において、3つの世代が2つのクラスタに分けられた [ $\chi^2(1)=13.184, p<0.001$ ]。「～ないです」の使用率は20代では96.0%で非常に高かった。30代および40・50代には有意な違いはなく同じグループになり、11.4ポイント減少して84.6%になった。



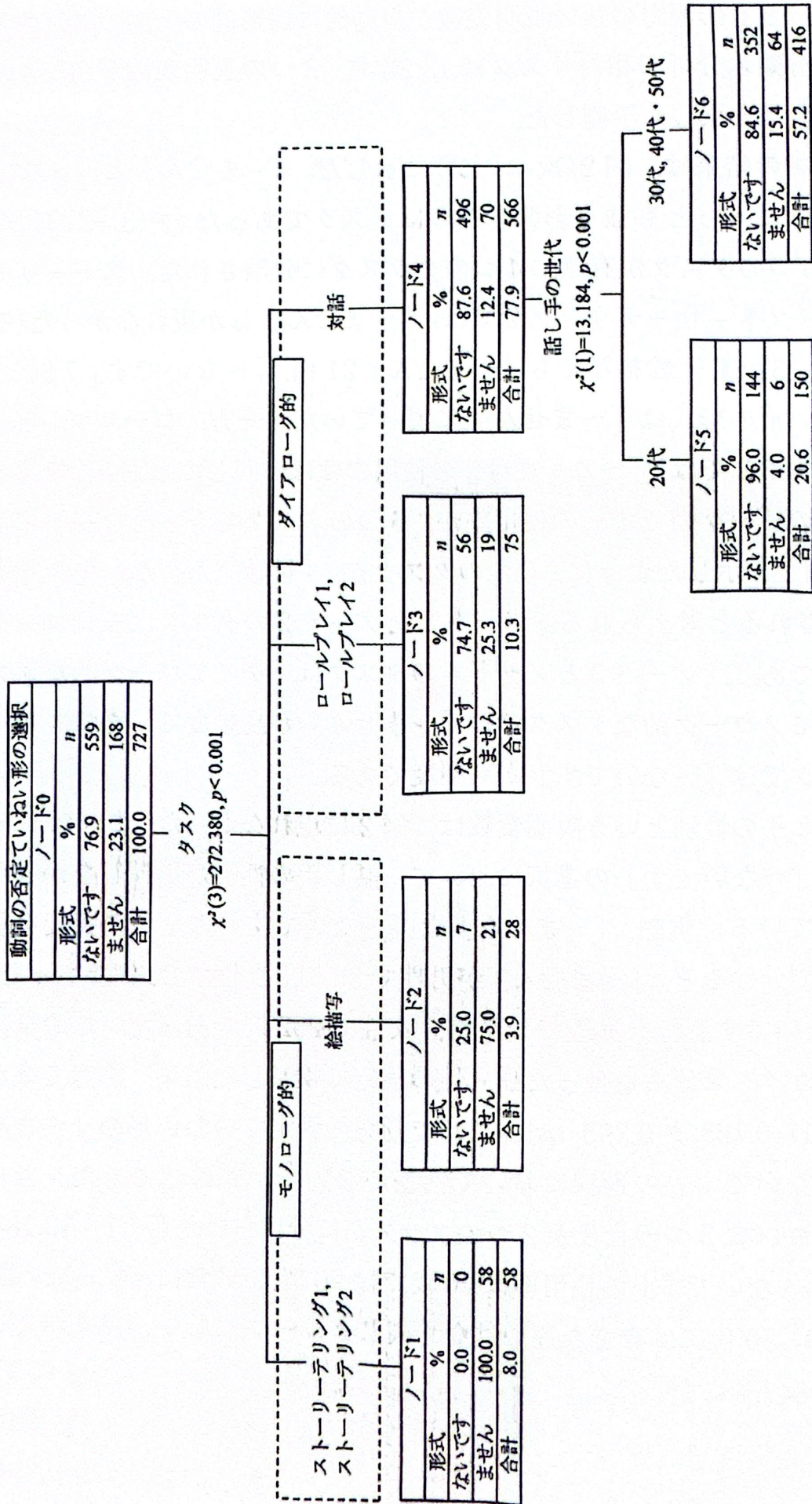


図2 動詞の否定ていねい形の選択を予測する分類木分析の結果



## 6. 考察

本研究の分類木分析の結果は、以下の3点に要約されよう。

第1に、タスクの違いが動詞の否定ていねい形「～ません」または「～ないです」の選択に重要な言語外的要因になっていた。さらに、タスクの特性を考えると、図2の樹形図でも点線の四角で示したように、対話的か否かが、「～ません」と「～ないです」の選択の頻度を決めているように思われる。具体的には、ストーリーテリングと絵描写は、コミュニケーションが一方通行で、モノローグ的なタスクである。それに対して、ロールプレイと対話は、話し手と調査者に直接的なやりとりがあり、ダイアログ的なタスクである。

落合(2012)では、「～ません」の使用率が「書籍」「国会会議録」「Yahoo!知恵袋」の順で下がっていると報告している。落合(2012)は、「Yahoo!知恵袋」に高い双方向性をみいだせるとし、双方向性が高いと「～ないです」が使われやすいと結論付けている。落合(2012)は、さらに対話の双方向性と発話の完全性の関係から解釈している。具体的には、「双方向性が高い媒体では話し手と聞き手がお互いに補い合って対話が進むため不完全な形の発話がなされることで、くだけた形である「ないです」が現れやすくなると考えられる。逆に双方向性が低い場合は内容を一度で伝えなければならず完全性の高い発話が要求されるため、より整った文にしようとする心理が働き、丁寧で規範的とされる形が好まれると考えられる」と、説明している。

図2の分類木分析によると、対話的か否かで「～ません」と「～ないです」の選択が分かれた。上記の落合(2012)の指摘を踏まえると、モノローグ的なタスクでは完全性の高い発話が要求されるため、標準的な「～ません」が多用されたのではないかと考えられる。一方、ダイアログ的なタスクでは、双方がお互いに補い合って対話が進むため、発話の完全性が低くなる傾向がある。ダイアログ的な例としては、調査者と話し手JJJ31は、例(1)のように発話している。

- (1) 調査者：んー、なんかこう、あの、ご主人とかもね、引退したら  
話し手：<うん>  
調査者：田舎に住みたいとかってそういうふうには



話し手：言わないです<sup>5</sup>ね

調査者：言わない

この例では、調査者が話し手のご主人について引退したら田舎に住みたいとか言いますかと完全に質問し終える前に、話し手が「言わないですね」と返している。そして、調査者が「言わない」と追いかけるように繰り返して、念押しをしている。このように補い合いながら対話が進む場合は、標準的ではない「～ないです」が、「～ません」よりも多用される傾向があるようである。

なお、ノード1のストーリーテリング1・2では「～ないです」が1例も現れなかったが、ノード2の絵描写では「～ないです」が7例現れた。具体的には、「あとなんかよくわからないですけど」「今ちょっと見えないですね」「瓶が冷やされてるのかわかんないですけど」「女の子か男の子かわかんないんですけど」「これ開いてんのかちょっとわかんないですね」「その時かわかんないんですけどさ」および「これはちょっとどこに行くのかわかんないんですけど」にみられた。これらは、話し手の意識が絵描写のタスクを離れて、調査者と直接対話した例である。つまり、下線部を発話した際、話し手は「絵描写の話し手」という役割を一時的に離れ、その場にいる調査者と対話したのだらうと思われる。その結果、図2のノード1(ストーリーテリング1・2)では「～ないです」の頻度が0回だったのが、ノード2(絵描写)では7回みられたのだと考えられる。

逆に、ダイアログ的なロールプレイ1・2および対話のタスクでは、話し手は「～ないです」を多用した。また、対話における「～ないです」の使用率が、ロールプレイ1・2より12.9ポイント高かった。この差は、会話内容の差異によるものと考えられる。ロールプレイ1が「依頼」で、ロールプレイ2が「断り」のタスクである。具体的には、ロールプレイ1はアルバイト役の話し手が店長役の調査者に依頼するタスクであり、ロールプレイ2は店長役の調査者からの依頼を断るタスクである。一方、対話タスクの内容は、話し手の現在、過去、将来のことで、雑談に近い。これにより、会話の内容が「依頼」「断り」の場合、話し手が標準的でより丁寧な「～ません」

<sup>5</sup> 下線は筆者による。以下同。



話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因を多く使用したと推測される。

要約すると、本研究の分類木分析の結果から考えると、「～ません」と「～ないです」の選択に対するタスクの影響は、まず「対話的か否か」が決め手であった。モノローグ的なタスクでは、調査者と対話するような表現を除けば、「～ません」が使われた。一方、ダイアログ的なタスクでは、「～ないです」が多用された。さらに、ダイアログ的なタスクについては、「～ません」と「～ないです」の選択に会話の内容が影響した。具体的には、「依頼」「断り」のタスク(ロールプレイ1・2)における「～ません」の使用率が、「雑談」のタスク(対話)より高かった。

第2に、「～ません」と「～ないです」の選択において、性差はみられなかった。先行研究(福島・上原 2003; 石川 2020a, 2020b)では、性差に関する報告が異なっている。福島・上原(2003)と石川(2020b)は、いずれも性差があると報告している。福島・上原(2003)では、女性は「～ないです」を使わず、男性のみが使ったと報告している。しかし、彼らが使用したテキストデータは小説における会話文であり、作られた話し言葉である。そのため、普通の会話で実際に産出する表現とは若干異なると思われる。福島・上原(2003)もその結果について、「人間が作り上げたもの(小説)に、性差に関するステレオタイプが反映した結果だと考えられる」と解釈している。また、石川(2020b)は、「～ないです」の使用率は、男性より女性のほうが高かったと報告している(女性は62.5%で、男性は53.7%)。しかし、石川(2020b)の報告は、男女の差は8.8%と小さく、ベース話者(男性3名)と対話者(男性3名、女性3名)を合わせて集計した頻度である。そのため、性差があると判断するのは難しい。また、ベース話者か対話者かという役割が影響して、このような差を生み出した可能性も残る。

一方、同じ著者の研究で石川(2020a)においては、性差がないと報告している(「～ないです」の使用率は男性では68.9%で、女性では67.1%)。石川(2020a)の研究は、本研究で使用したI-JASの対話タスクに基づいた報告である。石川(2020a)では統計的な有意差の検定が行われていないが、本研究は総括的な分類木分析を用いて、石川(2020a)の結論を裏付けた。普通の会話では、話し手の性差は「～ません」と「～ないです」の選択に影響しない



といえよう。

第3に、本研究で世代差がみられたのは、「対話」タスクのみであった。前で述べたように、通時的な観点からみると、「～ないです」より、「～ません」がより早く出現している。「対話」で世代差がみられたのは、30代および40・50代の話し手よりも、20代の話し手で対話における「～ないです」が浸透しているためだと考えられる。しかし、世代差がみられたのは「対話」タスクのみであった。このことから、世代差は対話においてみられる限定的な傾向であるといえよう。

石川(2020a)と石川(2020b)も、双方向のやりとりのある対話データで世代差がみられたと報告している。石川(2020a)が使ったデータは、本研究で世代差がみられた対話タスクのデータである。石川(2020b)が使ったデータは『BTSJ 日本語自然会話コーパス』であるが、IJASの対話タスクと類似したデータである。したがって、すべてが類似した特性を備えた対話データである。そのため、本研究および石川(2020a, 2020b)において世代差の影響がみられたのではないかと思われる。つまり、対話においてのみ世代差がみられる傾向があることを示しているといえよう。一方、モノローグ的なタスクでは、基本的に「～ません」が使用され、世代差はみられなかった。

## 7. まとめ

本研究は、話し言葉における動詞の否定ていねい形の「～ません」と「～ないです」の二形式の選択頻度を、タスク、話し手の性別、話し手の世代、という3つの言語外的要因で検証した。検証方法として、タスク、話し手の性別、話し手の世代、という3つを説明変数として、「～ません」と「～ないです」の選択を予測する分類木分析を行った。その結果、「～ません」と「～ないです」の二形式の選択にもっとも強く影響した要因は、対話的か否かであった。ダイアログ的なタスクでは、会話の内容がさらに「～ません」と「～ないです」の選択に影響した。また、性差はみられず、世代差はダイアログ的な対話タスクのみにみられた。これまでの先行研究は、「～ません」と「～ないです」の選択について複数の要因を指摘しているが、どの要因が決め手なのか、また複数の要因にどのような関連があるのかは明瞭では



話し言葉における動詞の否定ていねい形「～ません」「～ないです」を選択する言語外的要因

なかった。本研究は、話し言葉における「～ません」と「～ないです」の選択において、対話的か否かがもっとも強い要因であることを特定した。さらに、対話的か否か、会話の内容、話し手の世代といった要因の階層性も示した。今後の課題として、具体的な言語産出のコンテクストを含めて、「～ません」と「～ないです」を選択する言語内的要因を詳細に検討していきたい。

## 参考文献

- 石川慎一郎 (2020a) 「第 15 章 発話における丁寧体否定文の使用」, 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬(編)『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』pp. 185-204, くろしお出版.
- 石川慎一郎 (2020b) 「日本語自然対話における丁寧体否定形「ナイデス」「マセン」の選択—BTSJ コーパスを用いた検証—」『統計数理研究所共同研究レポート』435, pp. 1-18, 統計数理研究所.
- 落合智子 (2012) 「書きことばに現れる「ません」と「ないです」」『国文目白』51, pp. 14-22, 日本女子大学国語国文学会.
- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125, pp. 9-17, 日本語教育学会.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6-3, pp. 93-110, 国立国語研究所.
- 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査—「～ません」と「～ないです」—」『大阪外国語大学論集』11, pp. 51-66, 大阪外国語大学.
- 玉岡賀津雄 (2006) 「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性—副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に—」『自然言語処理』13-2, pp. 169-179, 言語処理学会.
- 玉岡賀津雄 (2023) 『決定木分析による言語研究』, くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』, くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』, くろしお出版.
- 野田春美 (2004) 「否定ていねい形「ません」と「ないです」の使用に関わる要因—用例調査と若年層アンケート調査に基づいて—」『計量国語学』24-5, pp. 228-244, 計量国語学会.
- 坂野永理 (2012) 「コーパスを使った述語否定形「ません」と「ないです」の使用実態



調査」『留学生教育』17, pp. 133–140, 留学生教育学会.  
福島悦子・上原聡 (2003)「日本語の丁寧体否定辞二形式に関する通時的研究——テキスト分析によるケーススタディ——」『国際文化研究科論集』11, pp. 79–89, 東北大学大学院国際文化研究科.

## 付記

本論文の執筆にあたり、湖南大学の肖宇彤先生および筑波大学の名誉教授の砂川有里子先生から貴重なご意見をいただきました。心より感謝申し上げます。また、3名の査読者から貴重なコメントをいただき、本論文の修正において非常に参考になりました。査読者および編者の皆様に心より感謝申し上げます。

(最終原稿受理日 2023 年 7 月 26 日)